



Contents

- ❖ スポーツの文化的意義と大東スポーツの歩み
～多文化共生の視点から～
- ❖ 『大東文化大学百年史』上巻刊行ご協力への
御礼と今後の編纂事業について
- ❖ 桜庭善一郎識『木下成太郎傳』
- ❖ 百年史編纂の現場から
- ❖ 大東アーカイブス活動記録

熊谷恒子による書道指導風景(昭和42年)

熊谷恒子(1893-1986)は、かな書の第一人者として昭和期に活躍した書道家。日本書道美術院理事等を歴任。銀座鳩居堂支配人の熊谷幸四郎に嫁ぎ、鳩居堂夫人とも称された。旧制時代、大東文化学院が池袋にあった頃より学院生の書道指導に尽力し、断続的ではあったが以来30年あまりにわたって大東の書道教育を牽引した。1967(昭和42)年に大東文化大学教授に就任。すでに70代であった熊谷の謙虚で穏やでありつつも熱心な指導は、その人柄を含めて学生たちから大いに支持を集めた。

Daito Archives
Newsletter

大東文化歴史資料館
ニューズレター
エクス・オリエンテ

Vol.

35

Ex Oriente

スポーツの文化的意義と 大東スポーツの歩み ～多文化共生の視点から～



大東文化大学副学長

勝又宏（スポーツ科学科教授）

2023年に創立百周年を迎えた本学であります。新たな100年への踏み出しとなる2024年元旦、能登半島地震が発生しました。被災された方には、心よりお見舞い申し上げます。誰もが、重く不安な気持ちで一杯の中、学生支援センターはじめ本学スタッフは、学生ならびに関係者の安否確認や、被災された方々のための授業・定期試験・入試等への対応に全力を尽くす年頭でした。その中で、明るいニュースとなったのは、第100回箱根駅伝での本学陸上競技部選手の活躍でした。9年ぶりのシード権獲得への喜びや賞賛に加えて、5区山登りでの本学走者の猛追、往路ゴール後に競り合った他校選手とハグによって互いを讃えたシーン、復路一斉スタートにより順位が見えにくい中でシード権獲得に向けて走る選手の姿など、唯一無二の“この時”に賭ける学生スポーツの熱量や清々しさを感じることができました。

本学100年の歩みにおいても、“大東スポーツ”はその時々の学生の競技への挑戦や努力によって、数多くの実績を残し、存在感を示してきました。体育連合会は1966年の創設以来、8種の競技において卒業生・教職員を含む延べ23名のオリンピック出場選手を輩出し、駅伝やラグビーをはじめ9種目にわたる競技で学生日本一に輝いています。もちろん、それ以外にも国内外の大会にて表彰台に上るとともに、数々のリーグ優勝を果たしています。当然ながら、讃えられるべきはこれらの輝かしい成果だけではなく、創設時16部で発足した体育連合会は現在40団体、全学生の約10%が競技に打ち込んでおり、彼らのスポーツへの思いや情熱であると思います。彼らがスポーツにエネルギーを注ぐその原点は、スポーツに本来内在している面白さであり、応援する私たちが熱くなるのもそれに魅了されるからでしょう。厳しい自然に立ち向かう、あるいは記録や自分より強い相手への挑戦、そして自分自身の壁を乗り越えて成長しようと奮闘する。このようなスポーツによる自己実現の過程は、全ての文化的活動にも通じるのではないのでしょうか。

本学が“多文化共生”を理念に掲げるなか、スポーツの価値を認識し、その発展に貢献すると同時に教育研究に結びつけることは意義深いといえます。本学は漢学による教育研究を起源とし、現在では8学部20学科にわたり学問の裾野を広げて発展しています。筆者の所属するスポーツ科学科がその一部であることは、スポーツの文化的意義を認識する重要性を感じさせます。ご存知の通り、本学は2018年度私立大学研究ブランディング事業に採択され、『東洋人の“道”を育てる』をテーマとして取り組みました。その一環として、「書道とスポーツ・健康科学の研究（書道の科学）」が実施されました。スポーツ科学の手法を駆使して、書道家が表現する造形芸術にアプローチするという異文化の垣根を超えた興

味深い試みです。このブランディング事業のテーマ設定について、デジタルアーカイブスには以下のように綴られています。

『花道・茶道、あるいは柔道・剣道といった伝統文化に共通する「道」は、東洋における人間性の根幹となる尊い思想です。書道もまた然り。書道とは書を通じて「人として踏み行う道」であり、いかなる時代にも揺らぐことのない、普遍かつ不可欠な教養の一つです。』

東洋人独特の“道”という“人の営みや人生に対する考え方や向き合い方”は、文化の垣根を越えて共通点があることがうかがえます。

武道では、“心技体”という言葉が重視されます。技を磨き、体を鍛えることで強くなろうとする考え方では不十分であり、心も磨くことで単に相手に勝つか負けるかという価値観を超えた境地に達することを目指す。それは修練を積んでこそ得られるものであり、その過程を通じて、道徳心を高め、相手を尊重し礼節を重んじる態度を養う人格形成の道です。スポーツとりわけ野球に携わってきた筆者としては、スポーツと武道との関係について、興味深いと感じる点があります。武術から発展した剣道、柔道、弓道、相撲、空手に代表される武道は、日本の伝統的な運動文化とみなされますが、オリンピックの競技種目であるのは柔道のみで、空手が東京オリンピック2020で初めて正式種目となりました。剣道の関係者によれば、「競技性が重視されると勝利至上主義に偏り、武道が本来大切にしている精神文化が薄れてしまう。オリンピック種目になることでその傾向が強くなる。」との懸念があるようです。

このような精神性をスポーツの活動に求める点が、日本のスポーツ文化に存在していると感じます。野球を例にとると、「試合開始や終了時に、両チームが整列して礼」、「グラウンドへの入退場時に脱帽して一礼」、「練習や試合中には“声を出す”“気合を入れる”」、「千本ノック」、「かた」（形）を重視する技術指導」、「素振り」という練習方法」、「剣道の竹刀の握りや振り方を例えながら打撃のアドバイス」、「宮本武蔵の兵法書“五輪書”からヒントを得ようとする」などです。スポーツ科学の発展・浸透によってこれらの事例は減少傾向ですが、日本人のスポーツ観を反映していると感じます。これも東洋の身体運動文化と西洋のスポーツ文化の交わりを示す身近な例といえるでしょう。異なる文化が交わるとそこから新しいものが生まれる。この自己組織的なダイナミズムは、多文化共生の魅力ではないのでしょうか。101年目のスタートを切った本学が、新たな価値の創造を目指してさらなる発展を遂げることを見守るとともに、筆者自身も微力ながら自身の専門性を活かして貢献できればと考えます。

『大東文化大学百年史』上巻刊行ご協力への御礼と今後の編纂事業について

百年史編纂委員会委員長

中村宗悦（歴史資料館館長・社会経済学科教授）

昨年9月20日の本学創立百周年記念式典（オンライン実施）に合わせて『大東文化大学百年史』上巻を無事刊行することができました。ひとえに皆さま方のご支援とご協力の賜物です。百年史編纂委員会を代表しまして心より感謝申し上げます。上巻は全国の大学図書館をはじめ都道府県庁所在地の公共図書館などに寄贈いたしました。また電子版を大学ホームページにアップロードし、どなたでも無料でお読みいただけるようにしています。この機会に大学が歩んできた百年の歴史にご関心をもっていただければ幸いに存じます。さらに12月9日には上巻刊行を記念した講演会を多目的ホールで開催し、理事長、学長をはじめ大勢の方にお越しいただきました。なかには現在大学史編纂の現場にいらっしゃる他大学の方々もお見えでした。編纂事業はまだ道半ばではございますが、本学の年史編纂事業にご関心をもってください誠にありがたく存じます。皆さま方におかれましては上巻をお読みいただき、是非、感想やご批判などを寄せいただければ幸いです。今後刊行予定の中巻および下巻の編纂に活かしていきたいと考えています。参考：『大東文化大学百年史』上巻PDF版掲載ページ (https://www.daito.ac.jp/100mannaka/details_00750.html)。

その中巻は現在鋭意執筆中で、来年度内の刊行を目指しています。中巻が取り扱う時期は、終戦直後から1980年代までのおおよそ40年間となります。ご承知のようにこの40年間は戦後復興から高度経済成長期を経て日本社会が大きく変わった時期となります。本学も建学の精神を引き継ぎながらも旧制の専門学校から新制大学として生まれ変わり、さまざまな社会的ニーズに応える形で拡大・発展を遂げてきました。1961年には池袋から現在の板橋区高島平に新たにキャンパスを設置し、翌年には文政学部を改組して文学部と経済学部が誕生しました。また1967年には増加する学部、学生数に対応する形で東松山キャンパスも作られ、現在の2キャンパス体制が完成していきます。とくに東松山に広大なキャンパスを有したことによって学生スポーツも盛んとなっていきました。そして、本学が創立50周年を迎えた頃には陸上競技部男子長距離の箱根駅伝での活躍（1975年に初優勝、翌年も優勝し2年連続優勝）やラグビー部の活躍（1975年に関東大学ラグビーリーグ戦一部で初優勝）などが全国レベルで注目を集めるようになりました。

また日本社会が国際化し留学生数も急増、また女子の大学進

学率も上昇してキャンパスに文化の多様性がもたらされたのもこの時期の特徴でしょう。二度目のオイルショック（1979～80年）を克服し、日本が世界におけるプレゼンスを飛躍的に高めていった1980年代半ばにはそうした流れを受けて東松山で4年一貫教育をおこなう国際関係学部も誕生しました（1986年）。

中巻では以上のように本学が大きな変化を遂げた時代の拡大・発展期を取り扱う予定です。上巻と同様に過去の年史では用いられなかった各種新資料（当時の理事会、教授会資料や学生の活動記録など）もふんだんに取り入れながら大学全体の動向と卒業生も含めた「大東生」の生き生きとした活躍の様子を描ければと考えています。また2025年度刊行予定の下巻は、中巻で取り扱われた時期以降から現在までの直近およそ30年強を扱う予定です。1989年に昭和が終わり、平成、令和と続く時代ですが、両元号を揮毫したのがともに本学卒業生であったことに縁を感じます。1991年の大学設置基準大綱化という大きな変化から始まる下巻対象時期をどう描いていくのか、現在、構想中ですのでこちらもどうぞご期待ください。

なお、この時期（1980年代以降も可）に大学に在籍されていた同窓生の皆さまや教職員OBOGの皆さまからの情報や資料提供も大歓迎です。もし当時の思い出の品などがお手元にごございましたら、100周年記念事業推進室内大東文化歴史資料館事務担当までご一報いただけましたら幸いです（連絡先は下記の通り）。

最後に大東文化大学史研究紀要編集委員会より『大東文化大学史研究紀要』第8号刊行のお知らせです。第8号は論文1編、研究ノート1編、資料紹介1編、書評1編が掲載されています。3月末にはお手元にお届けできるかと存じます。ご高覧賜れば幸いです。なお編集委員会では第9号掲載の論文等を募集しています。大学史に関するご研究の発表、資料のご紹介などございましたら是非奮ってご投稿をいただきますよう、お願い申し上げます。ご投稿に関するご質問などに関しましては100周年記念事業推進室内大東文化歴史資料館事務担当までお知らせください。

大東文化歴史資料館事務室

(100周年記念事業推進室内)

電話 / 03-5399-7403 FAX / 03-5399-7391

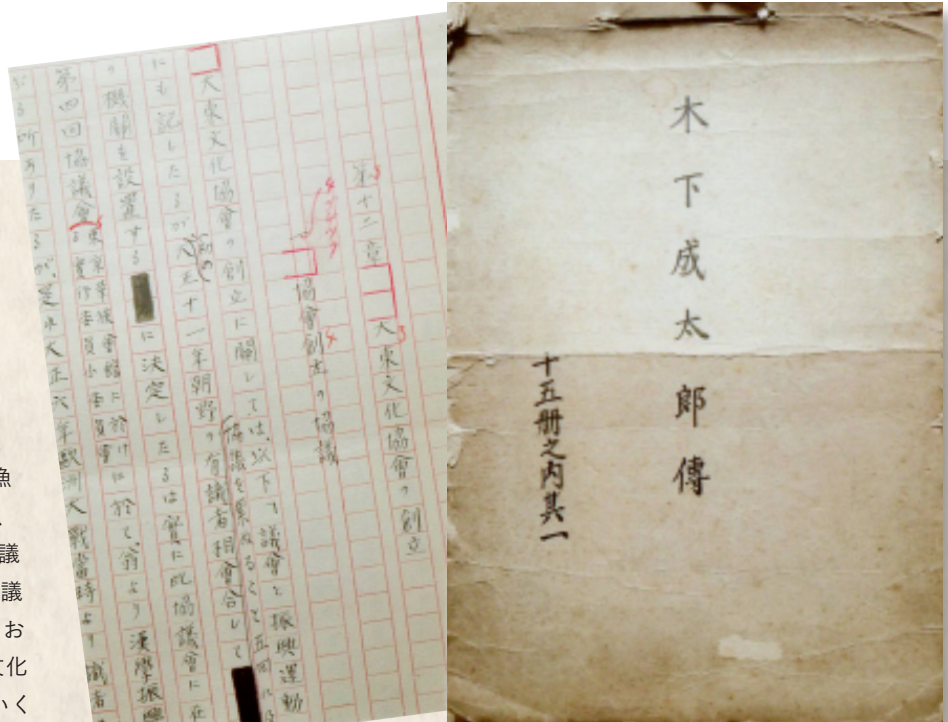
archives@ic.daito.ac.jp

桜庭善一郎識『木下成太郎傳』

このたび北海道の古書店の蔵中に長く保管されていた「桜庭善一郎識『木下成太郎傳』」の直筆原稿を、大東アーカイブスが所蔵することとなりました。木下は大東文化学院の「実質的設立者」ともされる人物で、創立100周年記念事業のひとつとして刊行した『大東文化学院の人びと』では第3章で詳しく取り上げています。本学創立100周年に際して貴重な資料が入手できたことは僥倖でした。

木下成太郎（1865-1942）は、北海道出身の政治家である。慶応元年に但馬国豊岡藩（現在の兵庫県岡崎市）藩士であった木下弥八郎の嗣子として生まれた。青年期に両親とともに北海道厚岸町へ移り、以降は農業や漁業等に従事しつつ水産組合長、漁業組合長などを歴任する傍ら、1900（明治33）年より厚岸町会議員となり、1907年には北海道会議員に選出された。一方、後半生においては大東文化協会および大東文化学院の創設に主体的に携わっていくこととなった。帝国議会衆議院本会議に提出された「漢学振興ニ関スル建議案」の審議において趣旨や意義について説明を行うと同時に、大東文化協会および大東文化学院の設立準備を精力的に進めていき、設立後は同協会理事（後に副会頭）に就任、長期にわたってその辣腕を振るった。これらにより、木下は「実質的な設立者」とも言われるようになったのである。また、昭和初期には帝国美術学校（現在の武蔵野美術大学）校主としてその発展にも寄与することとなり、両校の教育や運営へ大きな影響を与えることとなった。1942（昭和17）年に木下が死去すると大東文化協会は彼の功績をたたえ、史上唯一の「学院葬」を行ったが、葬儀には政界はもとより帝国美術学校関係者からも多くの参列者があり、多数の弔辞が届けられた。

さて、「桜庭善一郎識『木下成太郎傳』」は、桜庭善一郎によって1941（昭和16）年6月ごろまでにまとめられたものである。桜庭は主に大正期から昭和前期に活躍した北海道の歴史家で、北海道庁学務部道史編纂掛から依頼を受け「北海道に於ける政党の発達に就きて」「北海道に於ける新聞刊行の沿革に就きて」などを寄稿しているほか、札幌市役所嘱託として同市史編纂などにも携わっている。桜庭の遺稿となった『木下成太郎傳』は、原稿用紙（34×14字詰）を厚紙で綴じた「原稿」であり、四六版八切の大ききで全15冊の綴りからなる。



綴り1冊ごとに数章が収められており、全37章編成、途中13冊目（桜庭の原稿では28～31章に相当する部分）は欠けているが、1冊あたり平均して100枚前後の原稿用紙が綴じられている。1冊目冒頭には「例言」「目次」「緒言」が、15冊目の末尾には「年表」と「奥付」までが綴じられていることから、「草稿」ではなく明らかに「脱稿」と推察され、入稿用原稿であったと見られる。ちなみに「奥付」によれば、「著作兼発行者」を「木下成太郎傳記刊行会 右代表者桜庭善一郎」としており、また「非売品」とも記されている。

この『木下成太郎傳』は、ほぼすべてのページに非常に細かい指示書きが赤字でなされている。たとえば、「表紙」「とびら」に当たる部分の「木下成太郎傳」の文字の脇には、「翁の書（活字にあらず）」とある。これは木下直筆の文字を入れるよう指示するものであり、続く「序」は空欄であるが、「コレヲ誰カヘタノム」「職・勲ヲ記セサルコト」と指示している。全体を通じて空欄はこの「序」と「奥付」中の印刷および出版日のみである。こうした指示書きのほか、本文全体から木下の功績をたたえ、郷土の誇りとして伝えようとする情熱、熱意を強く感じる内容となっている。この『木下成太郎傳』を元として、1967（昭和42）年3月にみやま書房より『木下成太

郎先生伝』が刊行された。ただし、同書の発行者は「木下成太郎先生伝刊行会」、同会代表世話人（編者）は「橘文七」で、ほかに牧野克己、倉内幸治、狩野剛、古田佳之が刊行会世話人として名を連ねている。

橘文七は北海道の歴史家・文筆家であり、同書のほか、北海道文化資料保存協会より全4巻からなる『北海道史人名辞典』（1953～57年）や『北海道余聞』（北海道教学振興協会、1955年）『北海道私見』（北海道文化資料保存協会、1950年）などを編纂、単著として『躍進する北海道』（北海道同友会、1962年）ほか多くの著書がある。橘は桜庭の執筆した原稿を修訂して『木下成太郎先生伝』を刊行した経緯を「あとがき」において次のように語っている。

（前略）伝記は昭和十六年に脱稿すみにかかわらず、長く刊行にいたらなかった。

これは大戦による印刷事情の悪化や、敗戦という大きな障害にさまたげられたため、桜場善太郎氏苦心の結晶になるぼう大な原稿は、その後人々の関心の外におかれ、いたずらに筐内に埋もれて、長く陽の目を見ることができなかった。ところが数年前のある秋の一日、たまたま木下成太郎先生の追悼会の席で伝記刊行の議が再燃した。そして私は牧野克己氏らの協力を得て、不敏にむち打って旧稿修訂の大任をお引受けすることとなった。

桜場善太郎氏の原稿は、何しろ戦雲渦巻く昭和十五、六年ごろに執筆されたものであるから、今日から見ると文体も古めかしい漢文調で、使用されている字句も難解なものが多く、ことに漢詩・漢文が白文のまま引用されていることは、今日一般の人々にとって定めし不便であろうとおもわれた。よって文意をそこなわない程度において、できるだけ表現を平易にし、かな遣いなども全部新かな遣いに改め、漢詩・漢文は、かな交じり文に書き改めるなど、つとめて現代化するようにした。（後略）

『木下成太郎先生伝』は、橘自身が言うように、全体の文体や表現を現代的に修正したこと以外に加筆修正はほぼ行われていない。実際、刊行された『木下成太郎先生伝』と『木下成太郎傳』の原稿とを見比べてみると、それは一目瞭然である。つまり、『木下成太郎先生伝』は明らかに桜庭の作品であった。にもかかわらず、桜庭の名が「あとがき」および同書巻頭の「刊行にあたって」のなかで、いずれも「桜場善太郎」と誤って記されていることは残念である。また、刊行された『木下成太郎先生伝』の目次構成は全33章となっており、桜庭の『木下成太郎傳』は欠損箇所を含めて全37章構成であった。なぜ4章分が削られたのか。『木下成太郎傳』は13冊目の綴りが欠けていたことは前述した通りであるが、実はこのことと刊行され

た『木下成太郎先生伝』の章立てには関係があるようである。『木下成太郎傳』の12冊目までに収められた内容について、章節や見出しに至るまで、『木下成太郎先生伝』は寸分違わず踏襲している。具体的には、「第二十七章 教育に関する意見」の「十 教学刷新の徹底」まで、『木下成太郎傳』と『木下成太郎先生伝』は章節だけでなく内容に至るまでまったく同一の構成となっている。そして、『木下成太郎傳』では13冊目に収められていたと思われる28章から31章までが紛失しており、14冊目には「第三十二章 新体制に順応」からが綴じられている。一方の『木下成太郎先生伝』は、「第二十八章」として「新体制に順応」としているのである。以降、章番号のみを変更し、『木下成太郎傳』と同一の内容構成となっている。

幻となった13冊目の28～31章には、桜庭は何を書いていたのであろうか。『木下成太郎傳』の「目次」によれば、「第二十八章 国家総動員法の質問」「第二十九章 事変下の講演」「第三十章 東亜指導者養成機関」「第三十一章 大陸視察」となっていた。戦時体制へ移行した時期を描いており、後の編者が意図的に省いたとも考えられるし、戦後の混乱の中で紛失したために刊行時に省かれた可能性もある。特に第三十章には、「大学設立の建議」「建議案理由説明」の二節が挙げられており、木下がさらなる大学建設にも意欲的であったことがうかがわれる章立てであった。

最後に、桜庭が「誰カヘタノム」と書き残した「序」は、『木下成太郎先生伝』において北海道知事の町村金五と、武蔵野美術大学名誉教授であり同大学常任顧問であった名取堯が寄稿している。町村は「序」において木下を評して、「その功労の偉大さと多彩な点において、木下成太郎翁は代表的なひとりである」「とくに政友会支部長として本道開発のために献身されること二十余年、北海道開発のあらゆる分野にわたって、その推進につくされた功労は、まことに偉大」と述べている。

木下成太郎は1942（昭和17）年11月に肺炎によって死去した。桜庭の執筆時には木下はすでに70代半ばを過ぎていたが、東京と北海道とを頻繁に行き来する生活を送っていた。ただ壮健であった木下も当時は徐々に体調に異変を感じつつあったため、桜庭を通じて自身の生涯を後世へ伝える術を残そうとしたのであろうし、残された原稿からは自身の歩みを桜庭へ直接話した様子も見取れる。桜庭の脱稿から25年余を経て、橘が修訂し、北海道知事町村が「序」を寄せ、道人たちによる木下成太郎先生伝刊行会が同書を刊行した。これらの経緯を見ると、いかに木下が北海道民に愛された政治家であったかが伝わってくる。

（歴史資料館運営委員・専任研究員 浅沼薫奈）

資料寄贈ご協力のお願い

大東アーカイブスでは、引き続き本学関係資料のご寄贈をお願いしております。学園沿革史に関わる資料がございましたら大東文化歴史資料館事務室（100周年記念事業推進室内）までご連絡いただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

N e w s

百年史編纂の現場から

大東文化大学百年史編纂委員会副委員長

谷本 宗生

今号においても引き続き、私の担当として、もっか検討を続けている『大東文化大学百年史』のなかから、第六章である東松山校舎の開校と板橋校舎の整備、第三節にあたる本学の学部学科（文学部英米文学科、文学部外国語学科、文学部教育学科、外国語学部中国語学科、外国語学部英語学科、法学部法律学科）の増設について、その要点をみなさんにご紹介したいと思います。

文学部英米文学科の増設においては、（一）東松山キャンパスの校舎を、予定どおり完成し、一般教育を支障なく実施できるようにすること、（二）文学部英米文学科の専門教育科目の専任教員を、年次計画どおり速やかに充足させること、（三）入学定員を順守すること、などの留意事項が挙がりましたが、一九六六（昭和四一）年一二月、届け出のとおり承認されたのです。文学部では、すでに中国文学科と日本文学科が設置されていましたが、新たに英米文学科を増設した（入学定員五〇名）ことによって、本学として国際感覚を身につけた教養豊かな人材の育成を果し得ると期待されたものといえます。

文学部外国語学科の増設については、従来の中国文学科や英米文学科では、主として学問的研究に重きを置いてきたこともあり、外国語学科の設置（入学定員八〇名）によって、これからの国際社会でも十分に活躍できるという社会の要請に応えるべく、いっそう実社会と結びついた実践的な教育（中国語学を履修する学生にも英語学を、英語学を履修する学生にも中国語学を、それぞれ履修させる）を行うものとし、六七年一二月、届け出のとおり承認されたのです。中国語とともに英語にも堪能な人材を養成する外国語学科を新設することによって、本学の歴史的な伝統を重視しながらも、新たな時代に応じて活躍し得る青年有志を育てていこうとする動きでしょう。

さて一九七〇（昭和四五）年六月の理事会・評議員会で、本学の事業計画を審議した結果、文学部に教育学科を増設することについても、（一）教育学科の入学定員は四〇名とすること、（二）開設の時期については、一九七二年四月（学科増設申請一九七一年度）とすること、と定められたのです。関係図書や専門学術雑誌の購入、新設する学科教員の補充検討などを進めて、七一年九月には、中学校や高等学校の教員養成にとどまらず、新たに幼稚園や小学校の教員養成も担当し得るような時代に即応した実社会と結びついた教育を行う、教育学科の増設の届け出申請がなされたのです。翌七二年一月、（一）採用予定の教員について

は、予定どおりに確実に採用すること、（二）学生定員を厳守すること、といった留意事項がありましたが、教育学科の増設（入学定員四〇名）が届け出のとおり設置認可されたのです。

同じく七〇年六月の理事会・評議員会にて、文学部教育学科の増設とともに、文学部外国語学科を発展的に改組（廃止）して、新たに外国語学部を設置することについても、（一）文学部の学科中、外国語学科を廃止すること、（二）外国語学部を設置して、中国語学科・英語学科を置くこと、（三）中国語学科・英語学科の入学定員はそれぞれ八〇名とすること、（四）開設の時期については、一九七二年四月（学科増設届出一九七一年度）とすること、と定められたのです。七一年九月に、「建学の精神に基づき、学問の理論と応用を教授・研究して真理と正義を愛する自主的精神に充ちた良識ある人材を育成し、文化の発展と人類の福祉に貢献することを目的とする」外国語学部の設置を申請したのです。翌七二年一月、（一）専任教員に高齢者が多いので、今後中堅教員の補充について配慮すること、（二）基本的な図書及び辞典類を充実すること、（三）最近の学術雑誌及び言語学関係図書を増強すること、（四）文学部外国語学科は、一九七一年度限りで廃止すること、とされる留意事項が付されましたが、申請のとおり、外国語学部の設置（入学定員中国語学科八〇名・英語学科八〇名）が認可されたのです。

法学部法律学科の設置については、一九七二年六月の理事会で、審議を重ねた結果、（一）法学部を設置し法律学科を置くこと、（二）入学定員は二〇〇名とすること、（三）開設の時期については、一九七三年四月（学部設置認可申請一九七二年度）とすること、として可決されています。実はそれ以前、文学部に英米文学科の増設認可を届け出た（六六年九月）際にも、「将来の計画」として近いうちに、法学部法律学科を開設する旨を明記していたほどでした。まさに時代は、大学・高等教育の大衆化を迎えていく過程で、六〇年代後半には全国的な学園紛争も生じた社会状況のさなかであったといえます。本学法学部の設置に詳しい教授の村田克己などによれば、金子昇理事長より七二年九月末までに至急申請準備をお願いしたいと要請され、同年九月、なんとか文部省に法学部設置申請書を提出することができたそうです。一〇月に三度にわたり、文部省より手厳しい行政指導を受け、翌一一月には教員組織の不備からいったん認可保留とされます。これに対し、短期間での追加補充作業を急ピッチで進め、本学事務職員らと協力して

大東文化大学国際部第八号
昭和四十二年九月三十日

文部大臣 大塚 敬
朝 水 亨 弘 殿

敬 啟 者
学校法人 大東文化学園
理事長 南 誠 郎 殿

大東文化大学文学部外国語学科増設及び学生
定員変更届出書

このたび左記の通り学科増設並びに学生定員を変更したいので、
同紙書類を添えてお届けします。

正

大東文化大学文学部
昭和四十一年九月三十日

敬 啟 者
学校法人 大東文化学園
理事長 南 誠 郎 殿

大東文化大学文学部英文科増設並びに文学部日本語日本文学科及
び経済学部経済学科、経営学科学生定員変更届出書

このたび左記の通り学科増設並びに学生定員を変更したいので別紙
書類を添えてお届けします。

文部大臣 文部 一 殿

正

大東文化大学国際部第六号
昭和四十六年九月二十七日

文部大臣 高見 三 郎 殿

敬 啟 者
学校法人 大東文化学園
理事長 金子 子 殿

大東文化大学文学部教育学科増設および学生定員変更届出書

このたび左記のとおり学科増設並びに学生定員を変更したいので別紙
書類を添えてお届けします。

大東文化大学国際部第六号
昭和四十六年九月二十七日

文部大臣 高見 三 郎 殿

敬 啟 者
学校法人 大東文化学園
理事長 金子 子 殿

大東文化大学外国語学部設置認可申請書

このたび、大東文化大学外国語学部を設置したいので、学校教育法第四十
条の規定により認可を請求するよう別紙書類を添えて申請します。

昭和四十六年九月二十七日

文部省
46.9.30

申請書を仕上げ、一二月下旬文部省に再提出します（大東文化
大学法学部『法学部創設一五年 回顧と展望』一九八九年）。
七三年二月、（一）五〇周年記念館及び東松山五号館を計画ど
り完成すること、（二）図書は計画どおり購入、整備すること、

（三）既設学部を含め入学定員を守ること、とされる留意事項も付
せられましたが、関係者らの尽力もあり、文部省より法学部法律学
科の設置（入学定員二〇〇名）認可されたのです。

大東アーカイブス活動記録

2023年4月～9月

4.5	資料デジタル化にかかわる業務
4.6	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会） WG会議
4.10	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会） 創立百周年記念式典打ち合わせ
4.27	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会（オンライン）
5.1	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会）
5.2	川田瑞穂関係資料に関する問い合わせ（資料閲覧対応）
5.12	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会）
5.18	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・部会総会参加（於：明治大学）
5.30	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会） 辜鴻銘関係資料に関する問い合わせ（資料照会対応）
6.8	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会） 『大東文化大学百年史 上巻』掲載資料撮影
6.22	創立百周年記念式典打ち合わせ 入試広報課より入試関係資料借用、一部移管
6.27	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会） 創立百周年記念式典打ち合わせ 木下成太郎関係資料入手
6.29	土屋竹雨（久泰）関係資料受領
6.30	資料デジタル化にかかわる業務
7.13	百年史編纂委員会（第一回） 歴史資料館運営委員会（第一回）
7.20	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会） 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加（於：東洋学園大学）
7.24	同窓生より資料受領
7.28	創立百周年記念式典用動画撮影 『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会）
7.31	ニューズレター「Ex Oriente」vol.34発行
8.21	『大東文化大学百年史 上巻』打ち合わせ（定例会）
8.24	『大東文化大学百年史 上巻』念校最終確認
9.9	地域連携センター・100周年記念事業推進室共催公開講座 『創立100周年へのカウントダウン』開催
9.15	第27回企画展「入学試験の100年史—大東文化の学生募集—」公開
9.17	創立百周年記念式典（オンライン）
9.20	『大東文化大学百年史 上巻』刊行
9.21	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会
9.25	『大東文化大学百年史 上巻』PDF公開
9.28	WG会議

お知らせ

歴史資料館(大東アーカイブス)展示室において、
第27回企画展「入学試験の100年史—大東文化の学生募集—」を公開しております。
展示期間:2023(令和5)年9月15日～(終了日未定)
開室時間:毎週月～金曜日/9:00～17:00
展示場所:大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)
大学の休校日や入試日などに準じて閉室することがあります。
また、公開日を変更することがあります。詳しくは大学HPなどでご確認ください。

Ex Oriente | Daito Archives Newsletter Vol.35

発行:2024年2月29日
編集発行:大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)
〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10 大東文化大学徳丸研究棟3階
TEL 03(5399)7646 FAX 03(5399)7647
E-mail: archives@ic.daito.ac.jp
URL: https://www.daito.ac.jp/100th/archives/

『大東文化大学史研究紀要』 第9号 原稿募集

『大東文化大学史研究紀要』
第9号に掲載する原稿を募集
しています。投稿締切りは
2024年12月中旬を予定して
おります。投稿を希望される
方は、2024年10月末日まで
にこちらのメールアドレスへお
知らせください。ご質問等も
随時受け付けております。
エントリー（投稿）・そのほか
に関する問い合わせ先：
archives@ic.daito.ac.jp
「投稿規程」詳細について
は、百年史編纂サイト「継往
開来」（https://www.daito.
ac.jp/100th/bulletin/）
でも公開しておりますので、
ご確認くださいませようお願い
申し上げます。積極的なご投
稿をお待ちしております。



Ex Oriente

『Ex Oriente』（エクス・オリエンテ）は、かつて大東文化協会比較研究部が機関誌として1925（大正14）年4月に創刊した雑誌名でした。英仏独の3ヶ国語のうち、いずれかで執筆された論文のみを掲載し、欧米諸国へ向けて、東洋文化に関する最先端の研究結果を知らせたいとの目的で発行された同誌は、当時わずか3号のみの発行（1988～93年に東洋研究所が続号として4～6号を発刊）となりました。以降、幻となっていた雑誌名を大東アーカイブスで受け継ぐことといたしました。